

受験番号

2025年度入試

神戸国際中学校 A—I選考

国語

(2025年1月18日実施、50分、100点満点)

(注意)

- 1 解答用紙と問題冊子の両方に必ず受験番号を記入してください。
- 2 全ての問題に解答してください。
- 3 解答は全て解答用紙に記入してください。記入方法を誤ると得点にはならないので、十分に注意してください。
- 4 試験終了後、解答用紙と問題冊子の両方を提出してください。

① 次の文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定のある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(本文の一部表記を改めたところがあります。)

「冬に耐える」というのは、生物にとつていやなものである。

「冬の時代」をどのように乗り切るかは、都会に生きるビジネスマンにとつても重要な課題である。

それでは雑草は、どのように冬を過ごしているのだろうか。

木枯らしが吹く寒い日に、道ばたや公園の雑草を眺めてみると、どれも同じような格好をしていることに気がつくだろう。

よく見ると、冬の間、雑草は葉っぱを放射状に広げて、地面にぴったりと張り付いているものが多い。

この形は上から見ると、ロゼットと呼ばれるドレスにつけるバラの花の胸飾りによく似ている。そのため、「この形も「ロゼット」と呼ばれている。

①ロゼットは、実に機能的な形である。

地面にぴったりと張りついているので、寒風に耐えることができる。

しかし、葉は広がっているので、太陽の光は十分にあびることができる。さまざまな植物がこのロゼットで冬越しをしている。

タンポポやオニタビラコのようなキク科の雑草、ペンペン草で親しまれるナズナのようなアブラナ科の植物、月見草の異名を持つマツヨイグサの仲間、公園のよく踏まれる場所に生えるオオバコなど、花が咲けばそれぞれ似ても似つかないさまざまな種類の雑草が、冬の間は、見かけはそっくりなロゼットを作つて過ごしている。

ロゼットは、冬の寒さに耐えるために、機能的なスタイルである。しかし、よくよく考えてみれば、寒い冬は土の中で過ごすのが、一番リスクが少ない。

へビやカエルが暖かな土の中で冬眠をするように、多くの雑草が、種子や球根で土の中で冬越しをする。寒い冬に、わざわざ葉を広げている必要はないのである。

それでは、②どうして、ロゼットは冬の間も葉を広げているのだろうか。

冬空の下に葉を広げる小さなロゼットを見つけたら、試しに抜いてみてほしい。

そうはいっても、これはなかなか難しい。

簡単に抜けそうに見えるロゼットでも、根っこが深く伸びていて、なかなか抜けないのである。

かわいらしく見えるタンポポのロゼットでも、地面の下には一メートルの深さにもなるようなゴボウのような太い根っこを伸ばしている。とても引き抜くことはできないのだ。

ロゼットは寒風に耐えているだけではなく、広げた葉に受けた太陽光で作らだした栄養分を、地面の下の根っこに蓄えているのである。

そして、冬が終わり、土の中で眠っていた種子たちがそろそろ芽を出そうかと、動き始めたときに、ロゼットの雑草たちは、蓄えた栄養分を使って茎を伸ばして、いち早く花を咲かせることができるのである。

雑草の冬越しのスタイルは、かならずしもロゼットばかりではないが、たしかなが一つある。

寒風のなかでいち早く咲いた雑草の小さい花は、人に春の足音が近づ

いていることを感じさせる。このとき、いち早く花を咲かせて、私たちに春の訪れを知らせてくれる野の花たちは、かならず、冬の間も寒風に耐えて、葉を広げていた雑草なのである。

いち早く春に咲くといっても、春というにはまだ肌寒いころである。

こんな寒い時期に花を咲かせても、果たして昆虫が来るのだろうか。そんな心配をしてしまう。

(A)、動いている昆虫は少ないけれど、咲いている花も少ないので、虫たちはしつかりとやってくるのである。

このような闘たたかいを避けて、③ほかの花が咲かない季節に、自らの生きる場所を※ポジショニングしているのである。

ロゼットを作る雑草のなかには、小さな雑草も多い。

小さな雑草は、大きな雑草が生い茂ると、その陰では生存することができない。そこで、夏になって背の高い雑草が芽を出し、草丈くさたけを伸ばす前に、花を咲かせて、種をつけてしまう作戦なのだ。

(B) 冬が来なければ、いつも暖かなbヨウキヨウキのなかで、心地よく育つことができるのかもしれない。しかし、小さな雑草に生存の場はない。

④ライバルたちが土の中で眠っている冬という期間があるからこそ、弱い立場にある小さな雑草は、ほかの雑草に先駆さきがけて花を咲かせて、種を残すことができるのだ。

そう考えると、ロゼットを作る雑草にとって、冬はけっして耐えるべき季節ではない。小さな春雑草たちにとっては、冬は成功のために不可欠な季節なのである。

冬の間、土の中で眠っている種子にも、それなりのcセンリヤクセンリヤクはあ

る。(中略)

野菜や草花の種を播まいて水をやれば、約束されたとおり、やがて芽が出てくる。ところが、雑草は種を播いても芽が出てこないのだ。

春に芽を出す夏雑草の種が芽を出すのに必要な条件がある。それは、

⑤「冬の寒さを経験すること」である。

夏雑草の種子は、冬の寒さを経験したものだけが、春の暖かさを感じ、芽を出すことができるのである。

どうして、冬を経ないと芽が出ない仕組みを持っているのだろうか。

秋に散布された種子は、じつと春になっているのを待っている。もし、秋の終わりに※小春日こはるびより和の暖かい日があったとしたらどうなるだろう。

種子は、春が来たものと勘違いして芽を出してしまうだろう。すると、芽を出した雑草たちは、やがて来る冬の寒さでみんな枯れてしまうだろう。

(C)、種子は冬の寒さを経験した後でないと、暖かさを感じないようになっているのである。

土の中で眠る種子は、冬が来なければ本当の春が来ないことを知っているのである。

見せかけの暖かさは、やがて訪れる冬の寒さのd前触まへふれである。長く寒い冬の後にだけ、本当の春がやってくる。だから種子は見せかけの暖かさになぬか喜びすることなく、じつと冬の寒さを感じているのである。

(稲垣 栄洋 『都会の雑草、発見と楽しみ方』)

※ポジショニング：位置を定めること。

※小春日和：冬が始まったころの、暖かくておだやかな天気。

問1 Ⅱ a & d のカタカナは漢字に直し、漢字はひらがなで読みを答えなさい。

問2 (A) (B) (C) に入る言葉として適当なものを次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ また ウ もし

エ たとえば オ しかし

問3 ①「ロゼットは、実に機能的な形である」とありますが、どんな形ですか。三十字以内で答えなさい。

問4 ②「どうして、ロゼットは冬の間も葉を広げているのだろうか」とありますが、その理由を「～から。」に続くように本文から三十六字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問5 ③「ほかの花が咲かない季節に、自らの生きる場所をポジションングしている」とありますが、小さな雑草にとって、こうする利点とは何ですか。五十字以内で答えなさい。

問6 ④「ライバルたちが土の中で眠っている冬という期間」とありますが、「ロゼットを作る雑草」にとって、冬とはどのような季節とい

えますか。本文中から十二字で抜き出しなさい。

問7 ⑤「冬の寒さを経験すること」とありますが、それが必要な理由として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 冬の寒さを経験することで、好きな季節に咲くことができるようになるため。

イ 気温が低い季節を過ごすことで、種子を強くし、春の季節にいち早く花を咲かせるため。

ウ 暖かい季節がやって来たとはい、間違って冬の前に芽を出さないようにするため。

エ 気温の変化に敏感になり、春が来た時にいち早く成長をして、花を咲かせるため。

問8 本文の内容として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 冬の季節は虫たちが全くいないので、その時期に花をつけても意味がない。

イ 雑草の種も野菜や草花の種と同じように、播いて水をやれば芽を出して実をつける。

ウ タンポポのロゼットの下には、ゴボウほどの太さの長い根っこが張り巡らせている。

エ 夏の終わりに種を播かれた雑草は、秋の期間を過ごして冬に芽を出

すことができる。

□ 次の本文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定のある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。（本文の一部表記を改めたところがあります。）

驚いた。

こんなに驚いたのは久しぶりだ。

まさか人がいるなんて。

教室の入り口には『1-4』というプレートが下がっている。しかし、

一真たちが入学する一年前から空き教室になったと聞いた。

今年一年生は三組までしかない。四組の教室はほとんど物置化している。さまざまな教具や備品がしまい込まれ、ほこりっぽく、静かだ。ちょっと前まで、ここに自分と同じ歳の生徒たちが机を並べていたなんて、信じられない気がする。

一真がこの空き教室からグラウンドを見下ろす風景に惹かれたのは、入学して間もなく、四月の半ばだった。

美術部の恒例活動として、①新入部員は、一週間で校内スケッチ五枚以上を提出することを課せられる。スケッチでも※素描でも、絵を描きたくて美術部に入ったのだから課題自体は大歓迎だった。他者とは違う自分なりのスケッチ、僅かでも個性を感じさせる絵を描きたいと、一真は校内のあちこちを見て回った。

そして、一年四組の窓にたどり着いたのだ。そこからはグラウンドがほぼ見渡せた。北側に並ぶ駐輪場の※トタン屋根、陸上やサッカー、野

球といった運動部の部員たちの動き、プールわきにあるポプラの木の影、さらにグラウンドの向こうに広がる街の姿……さまざまなものが眼下にある。校舎前の桜が葉を茂らせれば、視界の三分の一を緑が覆うだろう。葉が散ってしまえば裸の枝の向こうにグラウンドが現れる。春、爛漫の花をつければ豪華な桜色の風景になるのだ。少し白っぽい土は夏には眩しき光を弾き、冬は（A）雪を被る。夕暮れには赤く染まり、雨の日は小さな水たまりをあちこちに作る。

季節により、時刻により、一真自身の心の動きにより、表情を変えるのだ。一年四組の窓近くに立てば、見慣れたグラウンドがまったくべつ場所のように思えたりする。

おもしろい。

（B）背筋に震えが走るほど、思った。

②すぐく、おもしろい。

課題を提出した後も、時々、この空き教室に足を向けるようになっていた。写生をすることもあったし、ただぼんやりと景色を眺めているだけのときもあった。どちらのときも、必ずスケッチブックをたずさえて行く。

今日は描くつもりだった。

斜めに深く視線を下ろし、桜の木々の間からのぞく陸上部員たちの姿をスケッチしようと思っていたのだ。

まさか人がいるなんて。

一年四組に誰かがいるなんて思いもしなかった。しかも、先客の少女は窓を開け、外を見ていたのだ。一真と同じように……。

黒目がちの大きな目をしていた。その目が見開かれたまま一真に向け

られている。少女も（ I ）のだ。とても（ I ）。

見覚えがあるような気もした。廊下で（ C ）姿を見たことがあるかもしれない。そうだ、三組に転校生が来たと聞いた。その転校生だろう。

少女が瞬きをした。それが合図だったように、心臓が（ D ）速い鼓動を刻み始める。

えっと、何か言わなくちゃ。

「あつ、どうも」

③軽く頭を下げてから、ばかやろうと胸の内で自分に舌打ちしてしまつた。

幼稚園児でももう少し、マシな挨拶ができるぞ。

窓から風が入ってきた。カーテンがふわりと動く。少女の髪も風に流れる。流れる音が聞こえてくる気がした。

「木谷くん？」

少女がつぶやいた。とても小さな声だったけれど、確かに耳に届いてきた。

キタニクン？

それがキタニという人の苗字であると気づくまでに、少し時間がかかつた。たぶん、二秒か三秒。

「あ……ごめんなさい」

少女の頬が赤らむ。内気な性格なのだろうか、恥じるように目を伏せてうつむく。窓から差し込む光が後ろから少女を淡く照らし出している。臙脂色と呼ばれる紫がかった赤のリボンと同系色のチェックのスカート、明るい灰色の上着、白いシャツのえり。ほぼ毎日目になっている苜蓿第一

中学校の制服だ。④そう、見飽きるほどに見ている格好……それなのに、とても新鮮に思えた。特別のもの、この世界に一つしかないもの、手を伸ばしたら消えてしまうもの、そんな風に感じてしまった。

「人違いしちゃって……ごめんなさい」

もう一度謝り、少女は足早に一年四組から出ていこうとした。

引き止めようと思った。引き止めてどうするのか。なんのために引き止めるのか、わからない。理屈でなく感情が、頭でなく心が動いた。この少女を引き止めなければならぬと。

「あの」

声をかけようとしたとたん、クシヤミが出た。ほこりが※鼻こうを刺激したのだろうか。

やばい。このタイミングでクシヤミなんて最悪じゃないか。ものすごくかつこ悪い。

焦れば焦るほどクシヤミは止まらず、一真はわきの下に冷や汗をかいていた。

マジ、最悪。

目の前にポケットティッシュの包みが差し出された。薄青色のティッシュカバーに入っていた。

「使って」

「あ……どうも」

また、どうもかよ。おまえはそれしか言えないのか。また、胸の内で舌打ちする。なんだか、⑤自分がどうしようもないほど間抜けな人間に感じられて赤面してしまう。この少女の目にはどう映っているのだろう。思えばさらに、頬が赤くなる。

(あさの あつこ 『一年四組の窓から』)

※素描…鉛筆・木炭などを使い、単色の線で物の形や影を描き表すこ

と。下絵として描かれるもの。デッサン。

※トタン屋根…薄い鉄の板に亜鉛をメッキしたもの。屋根板などに用い
る。

※鼻こう…鼻のあな。または、鼻のあなからのどまでの空間。

問1 (A) (D) に入る言葉として適当なものを次のア～オ
からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア とくくとく
- イ ぞくりと
- ウ きらりと
- エ うつすらと
- オ ちらりと

問2 —①「新入部員は、一週間で校内スケッチ五枚以上を提出するこ
とを課せられる」とありますが、一真はどのような絵を描きたいと思
っていたのですか。「〜」と書いていた。」に続くように三十四字で抜き
出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問3 —②「すごく、おもしろい」とありますが、一真はどのようなこと
に対して「すごく、おもしろい」と感じたのですか。六十字以内で答え
なさい。

問4 (I) () の中には同じ言葉が入ります。適当なものを次の
ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 楽しんでい
- イ 悲しんでいる
- ウ 喜んでいる
- エ 驚いている

問5 —③「軽く頭を下げてから、ばかやろうと胸の内自分で自分に舌打ち
してしまつた」とありますが、この時の一真の心情として適当なもの
を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 少女をじつと見つめてしまったことに対して、申し訳なく思ってい
る。
- イ 少女に対してまともな挨拶ができず、自分に対していらだちを感じ
ている。
- ウ 少女の揺れる髪に気がいってしまい、話しかけられたことに腹が立
っている。
- エ 少女を見ていると心臓が激しく鳴って、一言も言えないほど緊張し
ている。

問6 —④「そう、見飽きるほどに見ている格好…：それなのに、とて
も新鮮に思えた」とありますが、なぜ一真はこのように思ったのです

か。その理由として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少女に見とれてしまい、少女の制服がこの世に二つとないものに感じられたから。

イ 転校してきた少女が着ている制服は、自分が着ているものより新しく思えたから。

ウ 少女が顔を赤くして怒ってしまい、少女に嫌われたと思って涙が出てきたから。

エ 窓から差し込む夕日の光が、少女の制服をまぶしく照らし出しているから。

問7 ー⑤「自分がどうしようもないほど間抜けな人間に感じられて赤面してしまう」とありますが、この時の一真の気持ちを、四十五字以内で答えなさい。

問8 本文の内容として適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一真はグラウンドのスケッチをしようと考えて、一年四組の空き教室をおとずれた時、見知らぬ少女が一年四組の教室にいたのを見て、とても驚いた。

イ 一真は何度もクシヤミをしている時に、クシヤミを止めようとしているうちに焦りがだんだんとついでいき、わき汗がとまらない感覚におそわれた。

ウ 一真は出て行こうとする少女をどうしても引き止めなくなり、声をかけたものの、どうやって会話を続けなければいいのかわからなくなってしまい、悲しくなった。

エ 少女は一真のことは見ると、「キタニクン」だと勘違いしてしまった後、すぐに人違いだと気づき、恥ずかしくなってその場でうつむいてしまった。

☐ 次の①～④の文の中の——線部の語句と用法が同じものを、次のア～ウから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 先生に日番の仕事をたのまれる。

ア 自分で料理を作る。

イ すずしい風にふかれる。

ウ 教頭先生がお話をされる。

② ウサギはエサをほしがっているように見える。

ア 新幹線のように速い乗り物だ。

イ まるで星のようにかがやいている。

ウ 彼はこの計画に乗り気のように思う。

③ スマートフォンばかり見ている。

ア アイスを十個ばかり買ってきてください。
イ いいことばかりというわけではない。
ウ 彼女は小学生になったばかりだ。

④ 昨日の授業では、国語も勉強した。

ア 広告を見ていると、ドーナツも食べたくなってきた。

イ あと十分も歩けば、目的地に着くはずだ。

ウ 寒い日が、一か月も続いた。

四 次の①～⑤の四字熟語の読み方をそれぞれひらがなで書き、またその

意味を次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 異口同音

② 空前絶後

③ 大同小異

④ 七転八倒

⑤ 馬耳東風

ア 苦しみのあまり、あちらこちらへ転がること。

イ 細かな違いがあっても、全体的にはほとんど変わりがなく、またそ

ウ 多くの人が、一致して同じ意見を言うこと。

エ 人の意見やうわさを全く気にかけないこと。

オ 今までにも起こったことがなく、未来にもありえそうにないほど、
珍しいこと。